

会話におけるメタファーの機能 — 発語媒介行為としてのメタファー —

The Function of Metaphor in Conversation; As Perlocutionary Act

笹川 洋子

Yoko SASAGAWA

Abstract

This paper considers the uses and interpretations of metaphors in conversation, as well as their effects. Firstly, we review the theoretical framework of metaphor analysis. Secondly, we provide a brief overview of notable studies on metaphor in conversation. Thirdly, we analyze metaphor in conversation in three discrete situations; 1) education; 2) personal interchange; 3) political realm. Finally, the general and specific functions of metaphor are considered from the perspective of a perlocutionary act. We conclude that metaphor seems to be used to both strengthen and lessen confrontation, depending on its context.

Key Words : Conversation Metaphor Perlocutionary Act

1 はじめに

メタファー（比喩：metaphor）は詩や文学の技法として知られるが、私たちのごく身近な言語環境にもメタファーを見出すことができる。例えば、天逝したインドの数学者ラマヌジャンを語るいくつかの言説を見よう^{（注1）}。

- ・彼は「数学の魔術師」と呼ばれる。
- ・「整数が友だち」であり、擬データ関数をはじめ数々の数式を発見した。
- ・「寝ている間にナーマギリ女神が舌の上に数式を置いていく」。

ここでは豊富なメタファーが使われている。そして、直接表現による冗長な説明でなく、むしろ端的なメタファーが使われることで、私たちはラマヌジャンの偉大さをより効果的に理解できることに気づく。さらに言えば、メタファーは単なる直接表現の言い換えではなく、メタファーなしでは表現が難しい事象が多い。例えば、「整数が友だち」というメタファーの端的な表現を、メタファーを使わずに表現するにはより複雑な表現が必要になる。つまり、メタファーは何かを言い替えるだけでなく、より豊かな情感を聞き手や読者に伝えることができると言えよう。で

は、私たちは日常生活でどのようにメタファーを表現しているのだろうか。

本稿では、はじめにメタファーに関する先行研究、特に認知意味論と語用論の分野の論議を概観し、本稿の立場を定めたい。次に、会話表現の中のメタファーを観察し、それを発語媒介行為の視点から分析する。

2 メタファーをとらえる視点

本論では論点を狭め、含意のうちの比喩表現、すなわちメタファー（metaphorical meaning）に焦点をあて、実際の会話の中で私たちがどのようにメタファーを用い、どのようにコミュニケーション行為が起こっているかを観察したいと思う。なお、メタファーの定義は様々であり、直喩（direct metaphor）に対する隠喩（indirect metaphor）という意味でメタファーをとらえる場合が多いが、ここでは直喩と隠喩を含めた比喩表現全体をメタファーをとらえることにする。それは、会話とメタファーを扱った研究の多くが、メタファーを比喩表現の意味で用いており、本稿もそれに倣い、論を進めるためである。なお、直喩は「詩のようだ」のように、「～のような」などの語により、比喩表現であることを示す表現のことであり、隠喩は「朝の湖は一篇の詩だ」のように比喩表現であることを指示する語を伴わない表現であ

* 本学大学院教育学専攻教授

る。

まず、メタファーとは何かについて触れる。「彼女は白い百合だ」や「彼はかわいい怪獣だ」は容易にメタファーとして理解することができる。彼女は百合ではないし、彼が怪獣ではないことを私たちは瞬時に理解できる。ところが、「彼は哲学者だ」という発話は、字義通りの意味にも、メタファーとしても解釈することができる。つまり、前者の百合や怪獣の例は、言語形式を直示的に指示されたものから喚起されたものと関係づける用法、メタ照応的 (metaphoric) なものであるが、それに加え「彼は哲学者だ」では、文脈により、世界に存在するものと言語形式を直接関係づける用法、直示的 (deictic) な表現も可能となる (内海彰, 2013:12 参照)。

それでは、なぜ私たちはこの直示的用法と、メタファーを識別できるのだろうか。言語行為論の立場から、私たちは「ここは暑いね」という字義通りの意味が上手く解釈できない時、文脈により、「間接的言語行為 (涼くしてという依頼)」、「アイロニー (寒いという皮肉)」、「メタファー (議論の場を指して)」と解釈する可能性がある。サール (Searl, J. 1979) は考える。聞き手は「文の文字通りの理解→欠陥性がある (解釈が困難) →間接表現やメタファーとして理解」というルートを辿り、メタファーの解釈に至るわけである。

サール (1979:85) は、これまでのメタファー理論を「比較理論」 (comparison theory) の系列と「意味的相互作用理論」 (semantic interaction theory) に分けている。内海彰 (1993, 2013)、香春 (2017) などは次のように説明を加えている (注2)。

(1) 比較理論 (アリストテレス、ミラー (Miller, G., A., 1993) など)

アリストテレスやミラー (Miller, G., A., 1993) 等に代表され、二つあるいはそれ以上の事物 (object) を比較したり、それらの事物の間に類似性 (similarity) あるいは非類似性を見出す。

例えば、「A は鈴蘭の花だ」は、「A は鈴蘭の花のように可憐だ」を言い換えたものと言うのが、代替説 (substitution theory) であり、「鈴蘭の花」と「A」の共通点として、類似性を見いだすのが、比較説 (comparison theory) である。

(2) 意味的相互作用理論 (リチャーズ (Richards, J., H.), ブラック (Black, M. 1955) など)

喩えられるもの (主意 (tenor)) と喩えとなる

もの (媒体 (vehicle)) が相互に作用して、共有の特徴を生み出すことによって主意の意味が変化するという論である。

例えば、「議長は議論をかき分けて進んだ (The chairman plowed through the discussion.)」は、「かき分けた (plowed)」がメタファー表現で「メタファーの焦点 (the focus of the metaphor)」となる。残りの部分は「枠組み」であり、メタファーであるためには主語の部分の「枠組み」、述語の「焦点」が共存し、互いに影響する、つまり相互作用が必要である。メタファーは、通念、標準的な信念 (standard beliefs) により含意 (implications) の体系を組織化し、構築する体系であるとされる。

比較理論は、古代ギリシアの弁論術、アリストテレスの時代に遡ると言われる、比喩研究から、置換説 (substitution view) や直喩縮約説 (implicit simile view) などの考え方へと発展していくことになる。例えば、「彼は可愛い怪獣だ」は「彼は時々暴れるが、どこか憎めない愛らしさがある」などの縮約と考えるわけである。しかし、このような理論からは、なぜメタファーが、文字通りの陳述の置き換えにはない力を持つのか、説明できない。これを語彙の相互作用により説明しようとするのが、相互作用説であり、レイコフ等 (Lakoff George & Johnson Mark, 1980) によって、後述する概念メタファー (conceptual metaphor) 理論として展開されていくことになる。

3 概念メタファー

メタファー理論の展開の過程で、相互作用説を発展させ、認知意味論の視点からメタファーを解釈し、注目を浴びたのがレイコフ & ジョーンソン (Lakoff George & Johnson Mark, 1980) である。彼らは、比較の背後にある認知的ダイナミクスに注目し、楽しさや喜びは上がる (up)、悲しみや苦しみは下がる (down) という方向性で表現され、また「愛 (love) = 旅路 (journey)」「議論は戦争」に、「時間がお金」というように概念化されていることを、数多くの文例の分析により見出している。レイコフ & ジョーンソン (ibid.) は、メタファーは、ある概念領域を別の概念領域を用いることによって理解すると考え、人間の概念体系の多くがメタファーによって構成されていると述べる。メタファーの概念体系

は私たちの日常生活、行動様式に影響を与えているという。

内海（2013：251-252）は概念メタファーの特徴を次のようにまとめている^(注3)。

（A）我々の概念体系は、概念メタファーと呼ばれる概念間の比喩的類似関係によって構造化されている。特に、多くの抽象的な概念は、他の概念との比喩的関係によってのみ構造化される。

[例：「愛」という抽象的な概念を、具体的な「旅」の概念構造の写像として理解する]

（B）概念メタファーの成立は、我々の身体的な経験に基づいている。[例：Love is a Journey

という概念メタファーは、私たちの具体的な経験を通じて獲得される]

（C）比喩表現は、概念メタファーが言語へ具体化された表現である。[例：これが言葉に表現されると、「私は彼と同じ道を歩いていきます」というような「旅」で愛を語る比喩表現になる]

レイコフ等（ibid.）は、メタファーは詩や文学に特有のものではなく、私たちの日常生活に溢れていると述べているが、日常生活のメタファーはどのように観察されるのだろうか。

鍋島弘治朗（2005）は、批判的言語学（Critical Linguistics）の立場から、この概念メタファーをディスコース分析に応用した研究について紹介している。

ブラック（Charteris-Black, 2004）は、アイゼンハワー、ニクソンなどの談話を分析、政治をめぐる言説に分野の光と火のメタファーが用いられることを見出している。

また、フェアクラフ（Fairclough N., 1995:69）は麻薬取締に関する記事を概念メタファーから分析している。記事では戦争の用語が多用されていた。そして、戦争→犯罪取締、敵→麻薬密売人、攻撃→取締の強化、勝利→売人の駆逐、というように写像され、戦争→犯罪取締というメタファーが強化される。一方、こうしたメタファーと整合性のない「麻薬利益の没収」、や実際の戦争と混同した「軍隊の使用も辞さない」のような奇妙な論理も浮かび上がる。フェアクラフ（ibid. 1995）はこの記事の特徴として、1、情報源と書き手の区別のなさ、2、伝達内容自体の表象が中心という点をあげ、メディアの無批判な態度を批判している（鍋島、ibid.:51）

さらに、フェアクラフ&ウォダック（Fairclough

& Wodak（1997:268-71）はサッチャー首相のインタビューを分析しているが、この談話では英国を擬人化し、英国国民や同盟国を友人とするメタファーが用いられていた。実際には、個人とは異なり、国家は制度であり痛みを感じず、強大な権力（予算、軍、法執行権）を持っている。そして、政治家は国民の日常経験に訴えることで、政治を寓話化し、国家が個人とは異なることを見えなくする、つまり隠蔽することになるとフェアクラフ&ウォダックは述べている。

このように、概念メタファーの視点から見ると、私たちが日常に用いるメタファーは印象を強め、表現効果をあげるとともに、概念をすり替えることで、問題の本質を見えなくするような危険性を孕んでいることがわかる。そして、談話の中のメタファーの連鎖構造を読み解くことで、強調されるもの、反対に隠蔽されるものが顕在化すると言えよう。

最後に、鍋島（ibid.）でも紹介されているが、ヴァン・デイク（van Dijk, Teun 1988）は Dinish D'Souza（New York:Free Press,1995）に載った新右翼の保守的な論説を取り上げている。ここでは、ウィルス、免疫、衰弱、病変などの用語が使用され、アフリカ系の文化を病理と見なそうとするメタファーとして用いられている。そして、こうしたメタファーは、アフリカ系人種は人間であり、既存文化を実際に攻撃するものではないという点などを隠蔽してしまう^(注4)。

ここでは、新聞記事などの言説にみられるメタファー研究を見てきた。これらの研究は概念メタファーを理論的基盤とし、談話に応用したものだが、概念メタファー理論は社会文化を超え、私たちに共通のものとしてメタファーを措定している。しかし、日常会話を分析した会話分析研究、発話行為理論研究では社会文化により、私たちのコミュニケーション様式に違いがあることが報告されている。日常会話に現れるメタファーをとらえるには、概念メタファー理論とは違う視点を持った理論を確認する必要がある。

4 言語行為としてのメタファー

会話の中のメタファーの認識過程を想定すると、メタファーは聞き手にメタファーとして認識され、理解された上で、コミュニケーション上の効果が得られる。レイコフは私たちの認知の根底にある、概念的隠喩に注目しているが、これに対してサール

(1979) そして、スペルベルとウィルソン (Sperber D. & D. Wilson 1985) は話し手と聞き手の関係からメタファーをとらえる。グライス (Grice Paul) は私たちが遵守している会話の公理に違反することで、会話の含意は得られるとした。そう考えると、メタファーとしての解釈が可能な場合は、何らかの会話の公理に違反する事態が起きていることになる。

メタファーとしての解釈が起こるのは、具体的には質の公理と、関連性の公理に違反している場合だが、このうち関連性の公理への違反に注目し、メタファーを捉えようとしたのが、スペルベルとウィルソン (ibid.) である。彼らは、グライスのあげた発話の例は言内の意味も伝える発話だが、メタファーやアイロニーなど話者の意識的な公理の違反により、言内の意味が言外の意味に帳消しにされてしまう例をあげている。母親が遊びに夢中になり泥だらになった子どもの顔を見て、「あら、きれいな顔ね」と言った場合、質の公理だけでなく、「量」「関連性」「様態」も加えたすべての公理が破られてしまうのである。彼らは質の違反はメタファーの必要条件でも十分条件でもないと述べ、関連性の公理だけがメタファーの理解に関連すると述べた。このアイデアを理論に発展させた関連性理論 (relevance theory) では、発話は文脈効果と処理労力の最適な (optimal) バランスを計って表現される。

ただし、この論では、当然ながら字義通りの表現と、メタファーを含む含意による表現が同じ理論枠組みで捉えられることになる。しかし、同時にすべての表現が、文脈効果と処理能力のバランスにより用いられるという説明に還元されるため、なぜメタファーが使われるかという問いに答えることはできるが、なぜメタファーが豊かな表現性を持ちうるのかというメタファーの本質や、私たちはどのようにメタファーを用いるのかというメタファーの運用や機能に関する問いには答えにくい。

また、サール (ibid.) によれば、「ここは暑いね」という字義通りの意味が上手く解釈できない時、文脈により、「間接的言語行為 (涼しくしてという依頼)」、「アイロニー (寒いという皮肉)」、「メタファー (議論の場を指して)」と解釈される可能性がある。聞き手は「文の文字通りの理解→欠陥性がある→メタファーとして理解」というルートを辿り、メタファーの解釈に至るわけである。

ただし、サールの解釈では、メタファーは間接発

話行為と同じ枠組みで捉えられるため、スペルベルとウィルソンと同様にメタファーの効果、機能を十分に論じられないという問題は残る。

なお、内海 (2013) は「字義的な意味が不適切であると判断された場合にのみ、比喩的な解釈が行われる」とする二段階モデルは多くの実験的研究によって、可能性はほぼ否定されている (Gibbs, 1994) と記している。一方、同じように比喩理解の理解モデルを検討した、平知宏・楠見孝 (2011: 295) では、「字義どおりと比喩の意味の処理は、比喩に親しみやすさよって変わるとされているが、比喩の親しみやすさも、ある意味では処理の結果行われる分の評価形式の一つにすぎない」とし、「類似性の認知過程や抽象化の過程などの関与により、比喩的認知が決定されるのか、それとも比喩的認知を決定するような、比喩理解における全く新しい特殊な過程が存在するのか。今後検討すべき課題であると言える」と述べられる。つまり、内海 (ibid.) が根拠とする、字義通りの表現と比喩表現の理解に関わる処理時間は、処理以前の、どのように比喩表現が慣習化、概念化されるかという過程を説明しておらず、したがって比喩表現の理解過程全体を反映してないことになる。処理順序は、使用頻度、典型性、親密性、文脈との整合性など、最初に思い浮かぶ意味がまず処理されて、その意味が不適切である場合に、その他の可能な意味が処理されると考えられるという。つまり、予め用意されているいくつかの選択肢から選ぶということを考えると、字義表現と同じく慣用表現や比喩表現が選択リストして存在するが、それがどのように選択リストに取り入れられたかを説明しなければならない。日本では爽やかで香り高い女性を表せる「レモン」という比喩は、英語圏では気が違っている人という否定的な評価になり得るのは、そうした比喩表現が経験的に蓄積されたものであるという可能性を否定できない。慣用表現に関わる自動化の処理速度を根拠とし、コミュニケーションの解釈モデルを否定することはできないと言えよう。

なお、レイコフはメタファーを慣習的な隠喩 (conventional metaphor) 体系と新奇な隠喩 (novel metaphor) 体系に分けるが、前者はサールの慣用句 (idiom) + 死喩 (dead metaphor)、モーガンの慣用句 (idiom) + 貯蔵されたメタファー (stored metaphor) にあたる。後者はサールの純粋なメタファー (genuine metaphor)、モーガンの新鮮なメタファー (fresh metaphor) と重なると考えられる (村越,

1996、33-34)。サールとレイコフのメタファーの視点には共通点があるが、前述したように、サールは話し手と聞き手を想定した語用論を背景に、レイコフは一般的共有概念という認知意味論を基盤として理論を発展させている。

本稿では、会話におけるメタファーを観察するが、この手掛かりとなるのが、橋元（1989）によるメタファーの解釈である。グライスは聞き手の視点から含意を考えているが、橋元は話し手の視点から含意をとらえている。含意とは「ある特定の脈絡下において、中性的脈絡（シニフェを確定する最小限の脈絡）下にある場合とは異なる聞き手の認識的なし感情のなしいし行動的反応が生じることを意図し、期待する表現」である（橋元、ibid.）。これは、本稿で扱う言語行為のうちの発語媒介行為に関わる部分である。そこで、本稿では、橋元（ibid.）の視点を基盤にメタファーを考えていきたいと思う。

私たちは、発語媒介行為のレベルで、何らかの効果を聞き手に与えることを意図して、メタファーを用いると想定すると、実際のメタファーを用いた会話を観察する焦点を絞り込むことができる。そして、話し手が意図する発話効果に言語文化的な差異があるのであれば、メタファーに社会文化的差異があるかどうかという問いへの答えに近づけるかもしれない。

次節では、国内外の会話の中のメタファーを扱った研究を概観してみよう。

5 会話の中のメタファー

国内外での会話の中のメタファー研究は、膨大な会話データを含むコーパス研究の量的研究、そして医者と患者の会話、教室や大学の講義、教会の洗礼式、心理セラピー、政治スピーチなど、様々な場面での談話の質的研究によって行われている（Anna Albertha Kaal, 2012:47、他参照）。

会話におけるメタファーを量的に扱う研究では、主にコンピューター言語学の手法を用い、オンラインデータや会話コーパスが分析されている。まず、CANCODE コーパスを用いたカーター（Carter, 2004他）を見よう。CANCODE は500万語の日常の英国人の会話を集めたものである。会話は、専門的なものか親しいものかなどのかのコンテキストのタイプと、講演など話し手が主になるものか、意見を交わし合うものかなどインタラクションのタイプにより分別される。会話には、誇張表現や慣用句、

スラングやことわざなど様々な表現が含まれるが、カーター（ibid.）は、会話状況の違いを越え、会話のダイナミクスと、創造的な表現メタファーがどのように用いられるかに注目している。その結果、多様な表現は、親しさを強め、評価し、創り出し、会話の参加者に会話のポジションを与え、アイデンティティの表示をすることで、お互いに近づく（convergence）可能性を創り出すとしている。この創造性は、いたる処に存在すると同時に、その会話状況に独特の特別のものでもあるとカーター（ibid.）は記している。つまり、メタファーのような創造的表現は、日常的に共通の性質と、それぞれの会話固有の性質を有する可能性があるかと推測できる。

同様に、私たちは日常会話で「話しながら、考える（talking-and-thinking in interaction）」行為を行うが、こうした相互行為のダイナミクスに注目し、メタファーを観察しているのが、キャメロン（Cameron, 2003, 2007, 2011, a, b）である。キャメロン（ibid.）は、オンラインデータを用い、会話の中のメタファーについて量的な分析を加え、同時に、教育的場面での会話、アイルランドの革命家とその被害者家族の和解の会話という全く異なった状況におけるメタファーを観察することによって質的研究を行っている。キャメロンによると、教育場面でのメタファーは、1000語につき27の頻度で使われていた。このメタファーの頻度は、授業のトピックにより40から15の範囲で変化する。また、医者と患者の会話では1000語につき50、和解の会話では1000語につき100のメタファーが用いられていたという。コミュニケーションが難しい状況では、メタファーが多く用いられ、表現を調整する機能を担うと考えられる。

さらに、キャメロン（2003）は質的研究として、英国の小学校の生徒たちが科学的事象を理解する際のメタファーの機能を扱っている。教育的場面では、複雑な状況を説明するのに、直接的な比喻、すなわち直喩が多く用いられていた。カーターも日常会話では直喩が多く用いられていると報告しているが、情報伝達の正確さを優先させる場面であれば、直喩は隠喩より、分かりやすさでは勝っているため、より多く用いられるであろう。また、教育的場面とは対照的な和解の場面が、キャメロン（2007）では扱われている。IRA の元メンバーパット（Pat Magee）と、爆弾によって父を殺されたジョー（Jo Berry）の和解の会話の分析である。Pat が解放さ

れて、Pat と Jo は互いに理解し合うために、Pat が爆弾を用いた動機から会話を始める。キャメロン (ibid.:197) は、この会話ではメタファーは話者の間の相違：他者性 (alterity) に架橋する、すなわち自分自身を表現し、他者を理解するためにメタファーが用いられると述べている。さらにキャメロン (2008b:58) は、この橋渡し表現 (bridge term) で、話者はメタファーと字義通りの意味の双方、ある時は換喩 (metonymy) を用いながら、現実とメタファーの世界を行き来していると記す。例えば、ジョーとバットの和解の会話過程で、ジョーが突然の父親の死に理解を示す言葉として、父親の死を旅 (journey) というに例え、自分の気持ちを「旅の終わりに腰を下ろした 'sitting down at the end of a journey'」と表現している。キャメロンは、この「腰を下ろした (sitting down)」という橋渡し表現は、源泉ドメイン (source domain) と移動ドメイン (vehicle domain) を同時に表現している。つまり、感情的なプロセスの終着点と、バットとの会話の現在の状況を重ねて表現することで、移動ドメインをトピックドメインに持ち込み、メタファーを現実世界に移行させていると述べる。

さらに、会話の構造に関わるメタファーの機能を扱った研究としてあげられるのが、ドリュー & ホルト (Drew P. & E. Holt, 1998) である。彼らは、英国の家族の三年間にわたる電話会話を観察し、慣用的な200例の文彩表現 (Figurative Expression) について観察し、メタファーがトピック移行の連鎖、トピックのまとめのターンで出現しやすく、トピックの終結を導くという相互行為上の機能を果たしているとしている。

国内の研究を見よう。中野阿佐子 (2017) は、TV のトーク番組での会話のやりとりを題材とし、話が展開する中で観察されるメタファー表現について観察している。会話の中で相互に構築されるメタファーには、その写像関係、すなわち偏在する概念メタファーの関係を見ることができる。また、メタファー表現を理解する際、聞き手は、会話の中で構築される文脈の理解に合わせ、話者の属性を含む広いフレーム的知識が求められ、さらに相互行為においてメタファーは、話し相手の発話の内容を受け手が理解していることを示す手段となることが指摘されている。本研究でも、メタファー表現によるやりとり、相互行為が観察された。話し手側の用いたメタファー表現に応じることで、聞き手は理解をして

いることを示し、話者は知識の共有感覚を感じることができる。間接性が高い表現ほど、より広い範囲の情報を含み、しがって話者の共感度を高め、反対に攻撃的な会話の場合は、メタファーの使い方によって対立を深めることになるだろう。

また、西田紘子・横森大輔 (2017) は室内楽の練習場面における会話を観察し、そこに現れるメタファーを「概念メタファー」の視点から分析している。練習では「移動」を基盤とするもの、すなわち方向メタファーが用いられ、「道筋」があり、「音」がモノとして理解されたり、「全体的に、音程にリズムカルっていうか進む感じが」のように、運動したり、エネルギーや存在感があるものとして表現されていた。また、「楽しく会話として演奏する」など、音楽を会話として表現するものもあった。特筆すべきは、ほぼすべてのメタファー表現に身体動作が観察されたことである。レイコフらはメタファーと身体性に言及しているが、具体例には触れていない。その意味で、西田・横森 (ibid.) は有意義であるが、メタファーと身体性の研究は、本稿の範囲外にあるため、ここでは紹介にとどめる。

本節では、会話の中のメタファー研究のうちのごく一部をとりあげ、紹介した。キャメロン、カーター、中野、横山らは、それぞれに会話場面を分析し、メタファーに、情報を効果的に伝達し、表現を和らげ、コミュニケーションの対立を弱める調整機能 (turning device) を見出している。一方、フェイスの脅しに結び付くような否定的なことを表現する場合にも、メタファーによって脅しを軽減する場面が観察されている。ゴードン (Gordon D., 1983:53) は病院スタッフが患者のことについて否定的なことを話す時に、スラングを多く用い、同じように、カーターはフェイスの脅しに結び付くようなことを話す場合に、メタファーによって、表現を柔らかくし、脅しを軽減すること記している。ただし、さらに攻撃的なコミュニケーションが行われる状況では、前述した、ヴァン・ディック (ibid.) が煽情的な新聞記事で用いられていたメタファーの分析で明らかにしたように、メタファーが否定的な価値を付加し、表現の攻撃性を強めることも報告されている。また、会話管理という観点からは、ドリュー & ホルト (ibid.) は、メタファーにトピックをまとめる機能を見出している。

次に、先行研究で示された、このようなメタファーの機能が実施の会話で見出せるかどうかを探ってい

こう。

6 会話の中のメタファーの機能

先行研究では、様々な発話状況の違いを越え、メタファーは発話効果を強めるという共通の機能を持つことが指摘されている。という教育的な場面、和解の場面、政治的談話などの会話環境の違いにより、メタファーは異なる機能を持ち、会話の参加者や会話の動向に関わってくることが示されている。そこで、本稿では、(1) 専門分野に関わる会話、(2) 初対面の話者が親しさを示していく会話、(3) 過去の党首会談を観察し、それぞれの会話場面におけるメタファー表現について観察してみたい。

6・1 教育的な会話場面：専門分野について話す会話

教育的な場面については、キャメロン (2003) 他の研究がある。

〔会話例 1〕は、佐渡島庸平氏による三宅陽一郎氏へのインタビューの一部である。三宅氏はゲームキャラクターの人工知能について説明している。ここでは、専門的な知識を伝えるために、メタファーが繰り返し使われている。

〔会話例 1〕「コルクラボ：三宅陽一郎×佐渡島庸平 2018年3月14日」

佐渡島：今、ゲームの AI はどういうふうに作られているんですか？

三宅：一つは、エージェント・アーキテクチャというロボット工学の技術を用いて、センサー、認識、意思決定、運動生成、記憶の部品に分けて、それらを〔場面 1〕連携したシステムの中を、センサーが集めた情報が駆け抜けて行き、最後は行動として外に出す、ような、つまり情報が水だとすれば、知能は水車であるような、そんな構造で作っています。

知能っぽいものを作るための浅いモデルはたくさんあります。僕も普段はそれを使っています。でも、その奥にもっとあるんじゃないかと考えています。ただ、それを追求するとどんどん処理速度が遅くなったりするので……。

今は安定している人工知能、壊れない知能は知能ではないのではないかなと思うようになってきました。そんなことを考えているのは、世界で自分だけだと思いますが。自分は本当の知能を作りたい。そのためには、〔場面 2〕不安定さ、あやうさを持つ人工知能、たとえ

ば、ふさぎこんでしまう人工知能とか、情緒不安定な人工知能を目指してみることがたいせつだと思っています。

知能を知的機能と思っている人は、その機能、つまり function を実現できればいいと思っている。その人たちにとっては、アルゴリズムで機能が実現できれば十分なんです。そして、それは世の中に役に立つので、とても良いことです。しかし人工知能の開発者のうち、ごく一部のロボット系、キャラクターの AI 系を作る人は、本当の知能そのものを作りたいと思っています。それが可能だと思っているのは、さらに少ないかもしれません。

しかし、ゲームのキャラクター AI の特徴は、ゲームのキャラクターは本当のキャラクターでなくていいんですよ。〔場面 3〕プレイヤーから見て、そのキャラクターをリアルに感じられるのが一番重要なのです。つまり、ユーザーエクスペリエンスを作っている。たとえば、プレイヤーの足場を悪くしたり、危機に陥れたりして、知的鋭敏性を高めた後で AI を持ったキャラクターをぶつくと、そのキャラクターをより知的に感じるようになります。

佐渡島：今の話を聞くと、〔場面 4〕人も知的に振る舞っているだけという見方もできるのかなと思います。

三宅：そうですね。見る人にそう感じられればいい、というのであれば、「演じる」だけで十分な場合もあります。カットシーンと呼ばれる映画的なシーンでは実際、あらかじめ決められた演技をします。しかし、インタラクティブな戦闘や会話ではそのように行きません。自律的な行動が求められます。キャラクター AI は役者として、そして、自律的な知能として、双方の在り方が求められます。

このように専門知識を伝える場面では、話し手は繰り返しメタファーを用いることで、聞き手がイメージやスキーマを持ちやすくする配慮をしているように思える。笹川 (2016) では、コミュニケーションでブレイクダウンが起きた時に、会話の参加者が共有知識のレベルを調節しあうことで、合意に至り、会話を続けていく現象を観察した。話者は合意が難しい場合は、「すごいです」「いいですね」などの感想を表現し合うことで、共有知識のレベルをより一般的で合意しやすいものに移していた。今回例にあげた会話場面でも、メタファーを用いて、話者どうしが合意をめざす言語行為が見られる。しかも、〔抽象的なメタファー〕をより〔具体的なメタファー〕

に移行させ、聞き手が理解をしやすい方向に調整している。

〔場面1・1〕 エージェント・アーキテクチャ



〔抽象的メタファー〕 認識、意思決定、運動生成、記憶を連携したシステムの中を、センサーが集めた情報が駆け抜けて行き、最後は行動として外に出す



〔具体的メタファー〕 情報が水だとすれば、知能は水車であるような、そんな構造で作っています

〔場面1・2〕 本当の知能



〔抽象的メタファー〕 不安定さ、あやうさを持つ人工知能



〔具体的メタファー〕 ふさぎこんでしまう人工知能とか、情緒不安定な人工知能

〔場面1・3〕 プレイヤーから見て、そのキャラクターをリアルに感じられるのが一番重要



〔抽象的メタファー〕 ユーザーエクスペリエンスを作っている



〔具体的メタファー〕 プレイヤーの足場を悪くしたり、危機に陥れたりして、知的鋭敏性を高めた後でAIを持ったキャラクターをぶつけると、そのキャラクターをより知的に感じるようになる。

さらに、このような三宅氏の説明に対し、佐渡島氏は「今の話を聞くと、人も知的に振る舞っているだけという見方もできる」と意見を述べるが、これもメタファーによる表現である。これに対し、三宅氏は「インタラクティブな戦闘や会話ではそのようにいかない」「キャラクター AI は役者として、そして、自律的な知能として、双方の在り方が求められる」と応じているが、この応答表現にもメタファーによる表現が用いられている。メタファー表現にメタファー表現を重ねる発話のやりとりは、中野の言う、受け手側がメタファー理解の表示をしているが、同時に、間接表現による応答と同様、より高度なレベルでの知識の共有を引き出している。仲間内で用いられる隠語が、仲間同士の親密度を増すように、

メタファー表現の共有は共感度を強めることができる。こうした会話現象は「経験の分かち合い」「共成員性 (Co-membership) の相互可視化」「私はー私は連鎖 (串田秀也, 2017:37)」「第1の物語/第2の物語 (Sacks, H. 1992:24-260) と呼ばれるものである。

〔場面1・4〕 {プレイヤーから見て、キャラクターをリアルに感じられることが重要}

← (佐渡島氏のメタファーによるまとめ)

人も知的に振る舞っているだけ



〔抽象的メタファー〕 インタラクティブな戦闘や会話では自律的な行動が求められる。



〔具体的メタファー〕 キャラクター AI は役者として、自律的な知能として、双方の在り方が求められる。

なお、室内楽の練習のような言語化が難しい場面ではメタファーが多く用いられていたが (西田・横森, 2017)、専門知識を専門外の人に話す時と同じような現象が観察できるであろう。笹川 (前掲書) では、話者同士が理解しあっているという合意が難しい場合は、「いいですね」「おもしろい」などの簡単な感想を共有し合っていた。専門知識を伝える場合も、理解が容易な具体例に移行し、より厳密な知識の共有を目指していると考えられる。

また、はじめに使ったメタファーを、さらにメタファーで言い換える、キャメロン等の指摘する「メタファーの連鎖」を観察することができる。

6・2 社交的な会話場面：親しさを示す会話 (名大コーパス DATA16 (2001))

次に、親しいものどうしの会話におけるメタファー表現を観察してみたい。二人の女性は大学院生で同じ専攻に所属している。

〔会話例2〕 @参加者 F028・F004：ともに女性20代後半 @関係：大学院で同じ専攻に所属。

F028：スウェーデン行って帰ってきたときはもう、すごい、まあ、ホームステイしたっていうのもあったし、もう1日中、朝から晩まで、(うん) もう寝ても起きても何ていうか、スウェーデン語か英語でしか生活してなくてー、(うん) まあ、日本人の留学生に会うときも、

(うん) 会って日本語しゃべってたけど (うん)、全然こう、日本語使う割合が (うん) 少なかったから。(うん) もうー、日本帰ってからしゃべれないっていうか、(うん) もう何言ってるんだらうって状態になって。(えーっ)

F004: スウェーデンにいたのは2年だったっけ。

F028: 1年。

F004: 1年。

F028: 1年だけどー。

F004: 1年でそうなっちゃったの。

F028: 1年だからすごいもう何か、何ていうんだろう。(うん) すごい集中して勉強してたし、(うーん) すごいのは、ほんとに自分でもびっくりするぐらい何でこんな1年でこんな話せるんだっていうぐらい話せるようになってからー。(うーん) したら逆に今度日本帰ったらもう日本語出てこない。(うーん) どうし、何か、例えば (うん) うん、うんとか、そうだねーとか、そういう簡単なあいづちが全部出てこない<笑い> (うん、うん、) そーれでもう何か。(あー) もう〔場面1〕完全あやしい人になっちゃって。(ふーん) もうだから一緒に留学した子とかと (うん、うん) ばったり出会ったりとかしたら日本語でしゃべらない。(うん) 本当にスウェーデン語しゃべっちゃうっていう状況で。その方が楽だねとか言って。

F004: うーん、そうなんだ。(うん) それはすごくどっぷりつかったってことなんだ。

F028: もう、何か、(うん) 自分で何かスウェ、スウェーデン気に入ったからつかりたいっていうのもあった、からなのかもしれないけど。(ふーん) ほんとにもう、(うん) 楽しみまくってたっていうか。(ふーん) 留学したら苦労するぞってさんざん何か留学前はすごい勉強も大変だし、(うん) そんな遊んでるところじゃないとかすごい釘さされて行ったのに、(うん) 行ったら実際遊んでばかりいて。<笑い>

F004: ふーん。そうなんだ。えっ、遊びって、踊りに行くとか？

F028はスウェーデンに留学した当時、スウェーデン語ばかり話していたと語っている。「もう完全にあやしい人になっちゃって・・・(日本に帰ってきて、留学した子とはスウェーデン語で話した)」というF028のメタファーを使った発話に対し、F004は「それはそれはすごくどっぷりつかったってことなんだ。」とメタファーにより相手の談話をまとめる。F028はこれを受け、「自分で何かスウェ、

スウェーデン気に入ったからつかりたいっていうのもあった、からなのかもしれないけど。・・・」と「つかる」というメタファーを引き継ぎ、テーマを発展させている。

場面2・1 完全あやしい人になっちゃって

↓

聞き手による←[抽象的メタファー] それは、すごくどっぷりつかったってことなんだ。

↓

[抽象的メタファー] 自分で何かスウェ、スウェーデン気に入ったからつかりたいっていうのもあった、

↓

[具体的メタファー] 行ったら実際遊んでばかりいて。

ここでは、二つの種類のメタファーの用い方を観察することができる。一つは、Drew & Holt (1998) のトピック移行のまとめのターンで出現し、トピックの終結を導くという機能をもつと思われる「完全あやしい人になっちゃって」というメタファーである。まず、F004はスウェーデン語が1年で話せるようになり、日本に戻ってから、日本語が出てこなくなったというエピソードを語ってゆく。そして、F004は、このテーマの語りの終わりの方で「もう完全あやしい人になっちゃって」とメタファーを用いる。楽しい事例を話しながら、最後にメタファーでこのトピックをまとめているようである。

二つ目のメタファーもトピックを移行させているが、ここではメタファーを用いた共話の現象が見られる。共話は話者が協力し合い、二人で一つの発話を構成したり、相手の発話を言い換えて繰り返したりする発話現象である。ここではメタファー表現を用いた共話現象が見られる。すなわち、F004のメタファーを用いた語りをF028はさらに「それは、すごくどっぷりつかったってことなんだ」とメタファー表現でまとめている。さらに、F004はF008の「つかる」というメタファー表現を用い、「自分で何かスウェ、スウェーデン気に入ったからつかりたいっていうのもあった」と、話を広げている。このメタファーは具体的なレベルのメタファー「行ったら実際遊んでばかりいて」に引き継がれ、メタファーの連鎖をみることができる。メタファーを使うことで、テーマを共有し、話者同士が心的に近づき合う様子がうかがえる。話者は、同じようなメタファー

の表現形式を連鎖させながら、共話を行っている。

6・3 闘争的な会話場面：政治ポリシーに関わる 党首会談（2011年2月9日）

最後に、メタファーが戦略的に使われる、政治討論の場面を観察してみよう。

〔会話例3〕2011年2月9日 党首討論（国家基本政策委員会 合同審査会）参議院第1委員会室

〈谷垣総裁〉・・・ところが秋になったら（1）ころっと引っ込められてしまった。・・・

〈菅総理〉・・・ころっと引っ込めたというのは、間違っております。きちっと（2）与野党協議に乗っていただける、のですかというご質問にきちっとお答えください。・・・

〈谷垣総裁〉だからもう少し具体的にスケジュールを聞いてお答えすると言ってるでしょう。でそれよりか、菅さんね、問題はですよ、今強弁をされましたけど、（3）-①国民はそう思っていないと思いますよ。やっぱり、あの参議院選挙の時に相当迷走されて、そのあと引っ込めてしまわれたと思ってんです。こういうことはやはりですね、やっぱりトップリーダーがどれだけやる気かってことに関わってきますからそこはね、（3）-②みんな見てるんですよ。・・・

〈菅総理〉・・・

〈谷垣総裁〉（4）-①八百長相撲一緒に角番にとったから立ってくれみたいな話はね、これは私は乗れません。それで、それで、それですよ、（3）-③国民との約束違反を手伝えというのは私は筋違いだと思います。・・・それで、菅さんたちもその、（5）まじめにおやりになればたぶん方向性はそんな変わらないものになるだろうと、私たちは思っています。どうぞ我々のレベルまで早く追いついていただきたい。このように思います。

〈菅総理〉・・・まず今の谷垣総裁の答弁で言いますか、お話を聞いていると、お話を聞いていると、結局の所は、いかに私たちが4月6月に案を出しても、それでは議論には乗れないと、解散をしてそれが終わらなければ乗れないという、こういうお答えのように聞こえました。・・・

〈谷垣総裁〉総理ね、総理ね、急がば回れっていう言葉はご存じでしょう。だけど大事なのはですね、やっぱり（3）-④国民との信頼関係だと私は思いますよ。それで、案がないからだめだと言われたけど案を出してもだめだということかとかと問いかけがあったけれども、問題は、その案が、（3）-⑤国民との信頼関係から見

てどうかっていうことですよ。マニフェストの基礎を踏みにじるようなものだったら、（4）-③片棒担げと、マニフェスト違反の共犯にあんたなってくれと、冗談じゃありません。私のお答えは、そういうことであります。菅さん、急がば回れでありますから、ぜひ、急がば回れでやってください。それでね、じゃあ、まあ、この問題はまたあとえんえんやらなきゃならないかもしれませんが、えっ？あ、答えがありますか？じゃあどうぞどうぞ。

〈菅総理〉そのことは（3）-⑥国民に対する、何かごまかしということは全く当たりませんので、それだけは明確に申し上げておきます。

〈谷垣総裁〉。あの、（3）-⑦国民はそういうふうに思っていないんです。・・・

ヴァン・ディック（ibid.）らが、既に指摘しているように、この政治討論の場面では、主にこの当時の野党側の谷垣氏が用いるメタファーが相手を戦略に攻撃する道具としてなっている。この討論に観察されるメタファーの特徴は次のようにまとめられる。

1) 谷垣氏は「ころっと引っ込められてしまった」という表現で、ころっという軽いものが動くというオノマトペにより、菅氏側の安易な政策転換を批判している。「ころっと引っ込めた」というのは、間違っております」と菅氏も同じ表現で応じているが、ここには友好的な共話性はない。

2) 「与野党協議に乗る」と、菅氏は「乗る」という比喻を用いているが、協議が動く乗り物に例えられ、谷垣氏側の非協力的な態度を効果的に表現している。

3) 「国民はそう思っていない・・・みんな見ている」は、谷垣氏により繰り返し使われるメタファーである。「自分は思っていない」というより、「国民」や「人々」に批判の視点を振り替えるのは、政治的談話でたびたび使われる手法である。国民と自らが所属する党を一体化し、自らの立場をより巨大な組織に結びつけようとする。ここには「国民」という表現を使ったメタファーの連鎖が見られる。①「国民はそう思っていない」→②「みんな見ている」→③「国民との約束違反」→④「国民との信頼関係」→⑤「国民との信頼関係」→⑥「国民に対する、何かごまかし」→⑦「国民はそういうふう

に思っていないです」「国民」という言葉が、谷垣氏の批判メタファーの強い通奏低音となっていることがうかがえる。

ポメラantz（Pomerantz, 1986）が自分の意見を

「みんな」という言葉で表現するような「極端に大げさな定式化」と呼んだ装置である。

4) 谷垣氏が自分たちは協力しないという内容をメタファーによって言い換えている。表現には、過激とも言える強い表現が使われ、攻撃的である。こうした誇張表現が何度も使われることで、さらに攻撃性を強めている。

①「八百長相撲一緒に角番にとったから立ってくれ」
→②「国民との約束違反を手伝えというのは筋違い」
→③「片棒担げと、マニフェスト違反の共犯にあんなってくれと、冗談じゃありません」

5) 他にも相手を挑発する表現が用いられている。「菅さんたちもその、まじめにおやりになればたぶん方向性はそんな変わらないものになるだろうと、私たちは思っています。どうぞ我々のレベルまで早く追いついていただきたい」という台詞は、「今はまじめにやっていない」「我々のレベルに追いついていない」と、自分の正統性を誇張し、相手を見下した表現となっている。

政治討論では、このような戦略的メタファー表現が攻撃性を強める方向で用いられると考えられる。また、教育的会話、友好的な会話場面では、メタファーにより話者同士がお互いに合意ができるように発話内容の調整を行う。しかし、この政治会談の場では、対話者が予め自分でリストとして持っているメタファーを計画的に用い、相手を攻撃していくため、メタファーの動的变化が少なく、コミュニケーションに共同で関わる共話は見られない。

7 発語媒介行為としてのメタファー表現

話し手は、相手に自分のいいたいことを効果的に伝えたり、自分が相手のメタファーを理解していることを示すだけではなく、相手と会話場面をダイナミックに創り上げていく。

レイコフ&ジョンソン(1980)の概念メタファーは私たち個々人が根源的に持っているものとしてメタファーを考えたが、会話でのメタファーの使われ方を見ると、常に発話相手への影響を話者が意識しながら、話者が相互行為に臨んでいることがわかる。

発話者は何らかの効果を、知識伝達場面では、できるだけわかりやすく情報を伝える。相手に明確なイメージやスキーマを創るために、共話によって親しさを示し合う。政治討論の場面では、相手を言い負かす戦略的なレトリックの道具として、メタファーにより鋭さや強さを備える。話者が意識する、相手への発話効果を意識した言語行為は「発語媒介行為」と言われる。話者は、聞き手の認識・理解・評価を話し手がどう想定して発話行為を行うか想定し、メタファーを表現することになる。

会話におけるメタファーのやりとり、そして共話は、発語媒介行為のレベルで行われている。そして、話者はその効果を高めるために、抽象的なものから、具体的なものへとレベルを調整し、メタファーを連鎖させ、その効果を高める。メタファーがトピックをまとめる位置に置かれるのは、会話の話者が情報や感想をメタファーによって共有できるからであろう。メタファーが間接発話行為と同じ、発語媒介行為のレベルで交わされるのであれば、話者が共有できるメタファーは社会言語文化圏によって異なると考えられる。熊倉健介(2007)他は、日英のメタファー・イメージに異なる点があることを見出している。

本稿では、会話の中で用いられるメタファーについて、(1)知識を共有する場面、(2)親しさを示す場面、(3)政治論争の場面を観察してきた。メタファーは、端的に具体的なイメージを創り上げるため、イメージを共有しやすい。本研究では、メタファーは発話相手の意図を意識しながら、発語媒介行為として交わされることを確認してきた。ただし、なぜメタファーが端的に印象的なイメージを持ちうるのかは、レイコフの概念メタファーのレベルに戻り考える必要があろう。

最後に冒頭で引用したラマヌジャンの数式の魅力について語る言葉がある。

「彼の数式は複雑だから尊いのではなく、むしろ人類がまだ気づいていない、深くて微妙な数学現象を、簡潔な公式や具体的な等式で表現して見せているから凄いのである。いわば数学の詩人のよ

[発語媒介行為レベルでのメタファーの機能]

①教育的会話 {理解をめざし調整} ②友好的会話 {共感に至る調整} ③政治討論 {戦略的使用}

[概念メタファーのレベルでの機能] 表現を強める。概念範囲を調整。

図「会話におけるメタファーの機能」

うな数学者として、今もなお数学研究者にインスピレーションを与え続けているのだ」。

簡潔で具体的なという表現は、まさしくメタファーの力そのものを表現しているように思える。こうしたメタファーの持つ本源的な力を話者がどう利用するかという視点からの分析も必要であろう。今後の課題としたい。

[注]

(1) 木村俊一『数術師伝説』平凡社他

(2) 内海 (1993) はメタファー研究を概観し、研究の視点を次のように整理している。

認識：比喩とは何か。人は比喩、メタファーをどのように認識するのか。

理解：比喩表現の解釈とは何か、はどのように理解されるか。比喩の意味とは何か。

評価：比喩表現の良さはどのようにして評価されるか。比喩の効果。

なお、内海は字義通りの概念を source 概念、メタファーなどで表現される概念を target 概念とし、さらに二つの理論枠組みを三つに分け、説明を加えている (内海2013他、参照)。

- ・比較説 (comparison view) source 概念と target 概念の類似性に着目する立場 Ortony Tversky

- ・異常説 (anomaly view) source 概念と target 概念の非類似性に着目する立場であり、Kazs、そして Levin の意味素性分析、さらに van Dijk

- ・相互作用説 (interaction view) source 概念と target 概念の類似性と非類似性の両方に着目する立場 Richards Max Black (1955)

(3) グレディ (Grady,1997) は、概念メタファーを、さらにプライマリー・メタファーと複合的メタファーに分ける。プライマリー・メタファーは HAPPY IS UP (哀楽と上下の対応関係) や IMPORTANT IS BIG (重要・不変と大小の対応関係) のような原始的概念の写像関係であり、複合的メタファーは LOVE IS JOURNEY や THEOREMS ARE BUILDING のような複雑な構造を持つ概念間の写像関係である。プライマリー・メタファーは二つの概念の共起を経験することによって獲得されるが、複合的メタファーは複数のプライマリー・メタファーによって獲得されると考えられている。(内海,2013:252)

(4) 否定的なメタファーについて、ヴァン・ディックは否定的な概念メタファーのドメインを措定している。

A specific negative opinion may be emphasized by a catchy metaphor from a negative conceptual domain. (van Dijk,1998 : 272)

[注]

[参考文献]

内海彰 (1993)『比喩を中心とした語用論に関する自然言語理解モデルの研究』東京大学提出博士論文
内海彰 (2013)「比喩理解への計算論的アプローチ—言語認知研究における計算モデルの役割」『認知科学, Vol.20, No.2』, Pp.249-266.

内海 彰 (2018)「計算論的アプローチによるメタファー研究の最新動向と展望」,『メタファー研究 1』, ひつじ書房, Pp.153-190.

串田秀也 (2017)「発話デザイン選択と行為の構成」平本毅他編『会話分析の広がり』ひつじ書房, Pp.163-191.

香春 (2017)『メタファーに関する哲学的・認知言語学的考察』名古屋大学提出博士論文

杉本巧 (2016)「会話をデータとするメタファー研究の意義と展望」『広島国際大学総合教育センター紀要：創刊号』Pp.151-163.

平知宏・楠見孝 (2011)「比喩研究の動向と展望」『心理学研究第82巻第3号』Pp.283-299.

鍋島弘治朗 (2005)「批判的ディスコースコース分析と認知言語学の接点」『時事英語学研究2005 巻44号』, Pp. 43-55.

鍋島弘治朗 (2011)『日本語のメタファー』くろしお出版

鍋島弘治朗 (2016)『メタファーと身体性』ひつじ書房

鍋島弘治朗・楠見・内海彰編 (2018)『メタファー研究 1』

中野阿佐子 (2017)「話の展開とメタファー写像—認知メタファー理論の観点から」『日本語用論学会第19回大会論文集』Pp.263-266.

西田紘子・横森大輔 (2017)「室内楽の練習場面におけるメタファー表現の使用—概念領域と身体動作の傾向を中心に」2017年認知言語学会

橋元良明 (1989)『背理のコミュニケーション』勁草書房

村越行雄 (1996)「隠喩理論：サールとレイコフ」

跡見学園女子大学紀要 (29)、跡見学園女子大学、
Pp.29-47.

Anna Albertha Kaal (2012) *Metaphor in Conversation*, Proefschriftmaken.nl.Oisterwijk.

Drew, P. and E. Holt. 1998. "Figures of Speech: Figurative Expressions and the Management of Topic Transition in Conversation." *Language in Society* 27, Pp.495-522.

Cameron, Lynee (2003) *Metaphor in educational discourse*. London & New York, Routledge.

Cameron, L. (2007) Patterns of metaphor use in reconciliation talk. *Discourse and Society*, 18 (2), Pp.197-222.

Cameron, L. (2008) Metaphor shifting in the dynamics of talk. In M. Zanotto, L. Cameron, & Cavalcanti (eds.) *Confronting metaphor in use: An applied linguistics approach*. Pp.45-62. Amsterdam: John Benjamins.

Cameron L., Maslen, R., Todd, Z., J., Statton, P. & Stanly, N. (2009) *The Discourse Dynamics Approach to Metaphor and Metaphor-led Discourse Analysis*. *Metaphor & Symbol* 24, Pp.63-89.

Carter, R. (2004) *Language and creativity: the art of common talk*. London & New York, Routledge.

Charteris-Black Jonathan, 2004, *Corpus Approaches to Critical Metaphor Analysis*, Palgrave Macmillan UK

Fairclough, Norman (1995a) *Critical discourse analysis* London Longman

Fairclough, Norman (1995b) *Media discourse* London Arnold

Fairclough, N., & Wodak, R. (1997). Critical Discourse Analysis. In T. van Dijk (Ed.), *Discourse Studies: A Multidisciplinary Introduction* (Vol. 2), Pp. 258-284.

Grice Paul (1989) *Studies in the Way of Words* = 清塚邦彦訳 (1998) 『論理と会話』 勁草書房

Lynee Cameron

The discourse dynamics approach to metaphor and metaphor-led discourse analysis

Lakoff, George and Johnson, Mark. (1980) *Metaphors, We live By*. University of Chicago Press.

Lakoff, G. and Turner, M. (1989) *More than cool Reason*. University of Chicago Press.

Miller, G. A. (1993). Images and models, similes and metaphors. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (pp. 357-400). New York, NY, US: Cambridge University Press

Pomerantz, A. (1986). Extreme Case formulations: A Way of legitimizing claims. *Human Studies* 9, Pp.219-230

Richards H., J., (1991) *Theater Enough American Culture and the Metaphor of the World Stage*. Duke University Press.

Searle, J., R. (1979) "Metaphor." In Searle (1979) *Expression and Meaning*. Cambridge UP. Pp.76-116.

Sperber D. & Wilson, D. (1985) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Basil Blackwell

Van Dijk, T. A. (1998) *Idelogy*. London: Sage Publications Inc.

[会話資料]

会話例 1 : 「コルクラボ：三宅陽一郎×佐渡島庸平 2018年 3 月 14 日」 (<https://miyayou.com/2018/05/16/corklab2018/>)

会話例 2 : 名大コーパス DATA16 (2001)

会話例 3 : 2011年2月9日 党首討論 (国家基本政策委員会 合同審査会) 参議院第1委員会室

HP「書き起こし com」 (<https://www.kakiokosi.com/share/politics/85>)